

患者・家族のエンゲージメント

- 鎌田博司(医療法人社団哺育会 笠幡病院)
- 大庭明子(自治医科大学附属さいたま医療センター)
- 奥津啓子(武蔵野赤十字病院 医療安全推進センター)

第19回医療の質・安全学会学術集会 COI 開示

筆頭発表者名： 鎌田 博司

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。

はじめに

- 転倒転落防止対策は、リスク評価や対策において標準的指針が示されているが、患者・家族とのコミュニケーション焦点を当てた指針確立までには至っていない。
- 転倒転落対策における患者参画の促進を図ることを目的に、患者(高齢者施設利用者を含む)・家族とのコミュニケーションの充足に向けて議論をしてきた。
- 昨年の本学会において、患者・家族と医療・介護従事者(以下スタッフ)の転倒転落予防の考え方と対策への合意形成を図ることが特に重要であることを述べた。

本日の内容

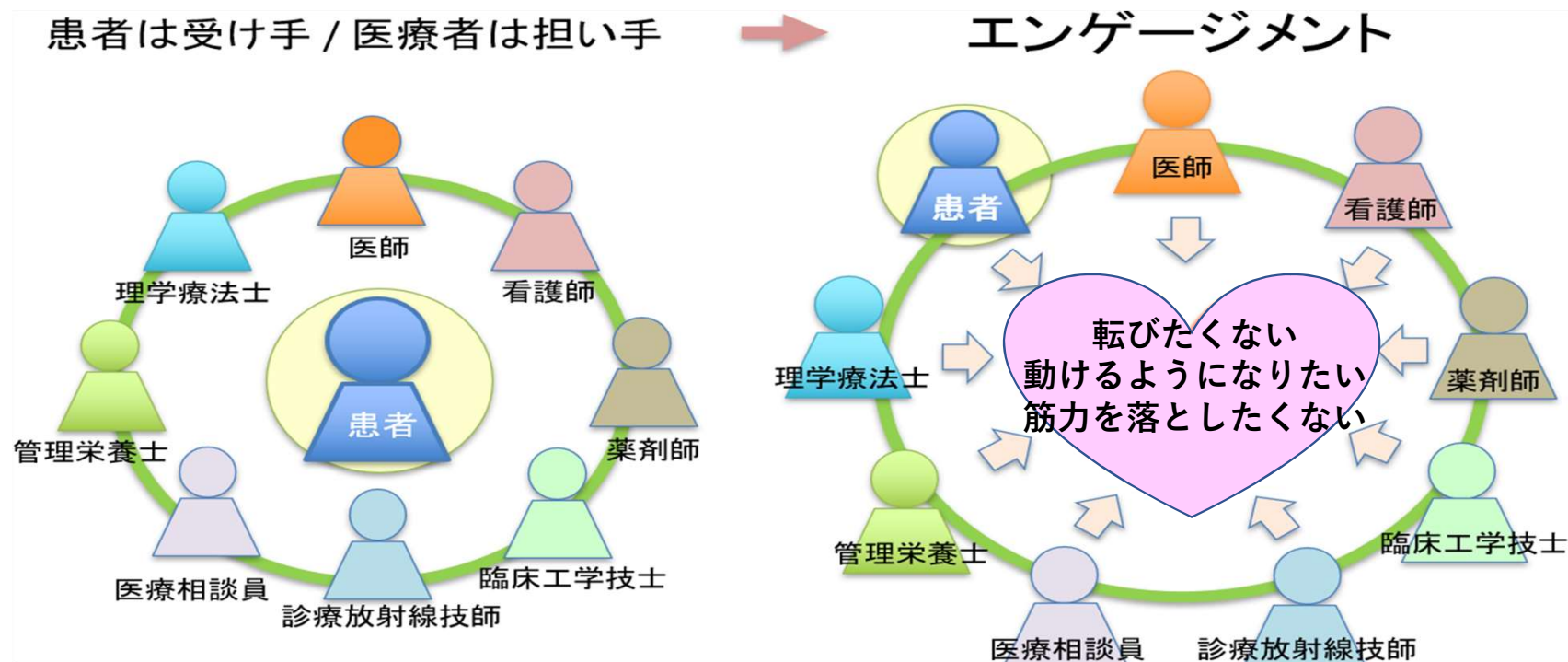
「患者中心の医療」のこれまでと
「エンゲージメントを重視」したこれから

※ Current Best Approachとしてのキー・ポイント

※ スタッフが感じる患者・家族のエンゲージメントでの不安

※ 外来での転倒予防

「患者中心の医療」のこれまでと「エンゲージメントを重視」したこれから



患者エンゲージメント

医療提供者同様に患者、家族、介護者の能力を強化するプロセスに関して、医療サービス提供の安全性、品質、人間中心性を強化し、患者自身のケアについて患者の積極的関与を促進し支援すること

Technical Series on Safer Primary Care (WHO 2016)

Current Best Approachとしての キー・ポイント

1. 患者のリスク認識
2. 患者の日常生活における背景と状況の理解
3. 患者・家族と病院・医療者の考え方と対策への合意形成
4. 繰り返しの対話

CBAのポイント

患者のリスク認識

転倒転落予防に対するスタッフの思い

患者さんの転倒・転落の危険性の評価を行い、予防策を立て実施しますが、医療スタッフが行う予防策だけでは全てを防ぐことはできません。**患者さん・ご家族と協力して転倒・転落の頻度を最小限にしたいと考えています。**

安全な入院生活を送っていただくために、**患者さんはもとよりご家族も含めて、転倒・転落の予防についてご協力をお願いいたします。**

転倒事故の防止のためには医療者だけでなく、**患者さん自身にも転倒の危険性や防止方法について知っていただくことが重要です。**

CBAのポイント

患者のリスク認識

患者の声

- 看護師に歩行介助を促された時は自己判断により必要なら呼ぶ
- 点滴棒は杖になるし、点滴は転倒の危険性に影響はない
- 病院では何もしなくていいので転倒しない
- 自宅にいるより、動くことも少ないから、こけることはない
- 歩行介助の必要性を感じない 先行研究による転倒転落に関する患者の意識調査より

患者自身も転びたいとは思っていない。

そして、自分が転ぶかもしれないとも思っていない。

CBAのポイント

患者のリスク認識



「病院の環境は、いつもの日常生活の場と違う」

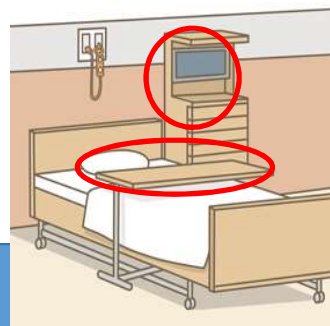
- ＊ 慣れない環境の中で、いつもと違う行動をいつもと違う動線でする状況が転倒・転落のリスクを高めることがある。
- ＊ 入院中は誰もがいつもと比べて転倒・転落を起こしやすい。

伝えるときのポイント

伝える内容はできるだけ具体的に、患者がイメージしやすいように表現する。

CBAのポイント

患者のリスク認識



伝え方の例

- 病院は空間が広いので、トイレや廊下でふらついてしまったときに、すぐに壁に手を添えて支えることができず、転倒してしまうことがあります。
- ベッドの周りにはテーブルや床頭台など手を置くと動いてしまうものがあります。ストッパーが外れているのに気づかずに手をついてしまうと、動いた際にバランスを崩して転倒しやすくなります。
- 家での生活では、ベッドからトイレに行くときはそのまま行けばいいですが、病院ではベッドに座った状態で靴を履いて、周囲のものを避けながら行かなければなりません。慣れない環境で生活動作が変わることで転倒のリスクが高まります。

「自分の行動に置き変えて考えられる情景がイメージできるような表現を意識する」

患者が情報を欲しているとき

入院時オリエンテーション

入院生活の環境が変化したとき

患者のADLが変化したとき

こんなはずではなかった・・・

病気を治すための入院ですが
転倒転落によってその目的が達成されなくなる状況が生じています

心臓の手術を受けるはずだったが、廊下で手すり側に置かれた医療者のワゴンを避けたために転倒し頭部を打撲した。人工心肺でヘパリン化による脳出血の危険があるため、一旦退院して後日再調整することになった。

ペースメーカー挿入時は創部をバスタバンドで固定されるが、片側の上肢固定により歩行が不安定になったことで転倒し、大腿骨頸部骨折し自宅退院出来なかった。

肺がんの手術後にトイレで転倒し、腰椎圧迫骨折となり、療養型病院に入院となった。

脳梗塞治療後に回復期病院でリハビリに励んでいたが、カーテンを閉める際にバランスを崩して転倒し、大腿骨頸部骨折を生じて急性期病院へ転院となった。

スタッフが感じる 患者・家族のエンゲージメントでの不安

「転倒・転落以外にも重要な説明事項が多く、患者・家族が覚えているのか」
「患者家族がどれくらい理解・納得できるのか」

トイレが終わったら・・・⇒お尻を拭く前に、ズボンを履く前になど、
患者の生活行動に合わせて具体的な表現で意識の残るように

「転倒転落予防策を提案しても、患者が拒否をしたり協力が得られない場合の
対応」

拒否や協力が得られないのは合意形成に至っていないから
これじゃなきゃダメではなく、この方法ならよいという合意点を探していく

「対策のために説明、文書配布など家族と医療者における手続き・負担だけが
増えるのではないか」

その説明内容、文書、本当に必要ですか？と見直すことも必要かも
患者エンゲージメントにおいて大切なのは、患者が医療を受ける目的
を果たし、その上で転倒転落予防につなげていくこと

外来における転倒予防

- 外来患者の転倒予防にも着目し、リスク評価の実施や施設環境の整備を進めている施設が増えている。

車いす安全使用についてのポスター掲示

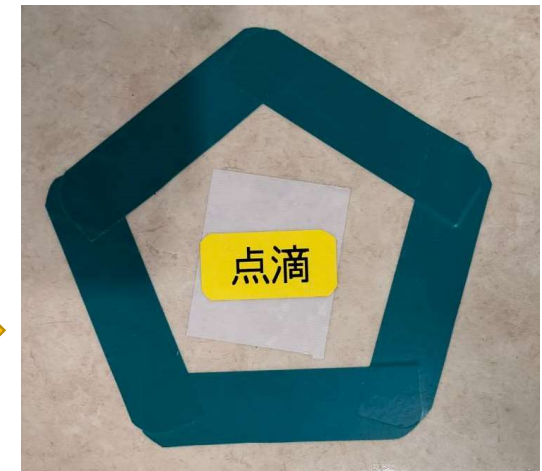


入院患者同様にリスク評価にて危険度を算定し、リスクを患者に説明後看護介入

対策例



座席周辺的环境整備の徹底のため靴置き場・点滴位置をゾーニング



エンゲージメントの視点から

診察室に入る前から患者・家族とのコミュニケーションの充足を

「歩くのが大変そうですが、お手伝いいたしましょうか？」

「今日はお一人で来られたのですか？」



「お辛そうなので車椅子をお持ちしましょうか？」



「次回の受診の時もお手伝いしますのでお声かけください」

ご清聴ありがとうございました。